

「旧友」

飯野文彦

仕事部屋でノートパソコンに向かっていると、背後から、声がした。

「よ」

ふり返ると、背後に置かれた簡易ベッドの上に、あぐらをかいてDが坐っていた。妖彦は答えず、ノートパソコンに視線をもどした。

「何だよ、無視か。相変わらず、冷たいやつだな」

背後から聞こえてくるのは、まちがいにDの声だった。

答えるどころか、全身が凍りついた。その意味ではたしかに妖彦は〈冷たいやつ〉になった。それもとうぜんだ。何しろDは、すでに死んでいる。

Dとのつきあいは古い。大学時代に所属していたサークルの同級生だった。学生時代は、よくつるんで飲み歩いたものだ。大学を卒業後、妖彦がフリーのライターになったのに対して、Dは某出版社に就職した。何年か営業部を勤務した後、小説誌の編集となり、前々から作家志望だった妖彦に声をかけてくれた。

おかげで、その雑誌がつぶれるまでの五年あまりの間に、いくつかの短編を発表する

ことができた。謂わば恩人である。

小説誌がつぶれた後、Dはアニメ雑誌の編集にまわされたものの、郷里で母親が体調を崩し、介護のために会社を辞めた。以後五年あまり、年賀状のやりとりだけで、毎年、今年こそ飲もうとお互い書きながらも、そのまま疎遠になっていたのである。

Dが死んだのを知ったのは、三ヶ月ほど前だった。同じサークルの同級生から、電話があつて聞いたのだ。最初は介護していた母親のほうではないかと思い、聞き直したがちがった。

——それならなぜ、もつとはやく連絡してくれなかったんだ。

妖彦はそう訊ねた。

——俺もさつき、聞いたんだ。俺、今OB会の幹事だろ。Dのやつ、ここんとこ出てこないから、あいつの予定に合わせて開こうと思つて、電話したんだ。そしたら妹さんが出て……。

——それでも、なぜ……。妹さんがいるなら、連絡くれてもいいじゃないか。

——それが、どうも自殺だったらしい。

その言葉を聞いて、妖彦は驚きと同時に、やっぱりと納得すらしていた。Dは博学で頭の切れる男だが、繊細なところがあつて、些細なことを気にしたり、深く悩み込んだ

りする性格だったのだ。

学生時代だけでなく、編集者と物書きとしてつきあっていた時期にも、極度に落ち込むDの姿を見たことがある。慰めたり、宥め賺したりしながらも、

——こいつはどうして、そんなにぐじぐじ考え込むんだろう。こんなことでやっているのか。

と思ったのは、一度や二度ではない。だからというのも変だが、友人から自殺だったらしいと聞いたとき、やっばりと感じてしまったのだろう。

Dの実家に電話してみようと思ったが、決心がつかず、妖彦はお悔やみの言葉を連ねた手紙を送った。一週間ほどして、Dの妹から返事が来た。

やはり自殺だったとのこと。妖彦のことはDの口から聞いていたが、そのような事情もあって、連絡できなかった詫びが、書き連ねてあった。

手紙が届いた日は、Dを忍んで、一人飲み明かし、近々墓参りに行こうと決めた。それなのに……。妖彦の郷里からDの郷里まで、特急電車を乗り継いでも五時間近くかかることもあって、足を運べないまま月日だけが過ぎていった。

そのDが後ろにいるのである。

「まあ、いきなりこんな風に現れたら、びっくりするよな」

Dが言った。妖彦が答えられず、ジツとしていると、さらに、

「安心しろ。手短く済ませて、帰る」

と笑いを含んだ声で言った。それに神経のどこかが引きずられたのか、気がついたら、
「帰るって、どこに？」

と訊ねていた。

「気になるか？」

訊ね返されて、なぜそんなことを聞いたのかわからず、

「いやッ」

と否定したものの、凍りついた気持ちだが、オンザロックの氷のように揺れた。それに
追い打ちをかけるように、Dが言う。

「ネタになるぞ」

たしかに、と思い、それなら……と振り向こうとしたが、だめだ。膝から下がくが
く震えて力が入らない。

「まあ、やめておこう。時間もないことだし。さっそくで悪いが、本論に入る」

Dはそう前置きしてから、

「金返せ」

と言ったのである。

ピキツと音がして氷が溶けたように、妖彦の身体が動いた。椅子を反転させて、一メートルと離れていないDと向き合った。状況の不可解さも恐ろしさも忘れて、

「何だよ、それ」

と訊ねていた。

「俺が編集するとき、打ち合わせの後、中華料理屋でおごっただろう。そのときの二千元、返してくれよ」

「前々から言おうと思ってたんだけど、それおかしくないか？」

「何がおかしい。借りたものは返すのはあたりまえだろう。忘れたって言うんじゃないだろうな」

「覚えてるよ。でも、そうじゃなくて、お前、矛盾に気がつかないのか」

「あのとき四千元ながしの料金を払ったのは、俺だろうが。おまえは払ってない」

「それはそうだが、その前にお前『おごった』って言っただろう」

「そうだったけ？」

「しらばっくれるなよ。『打ち合わせの後、中華料理屋でおごった』って、今言ったじゃないか」

「間違つてないだろう。金を出したのは俺だ。払っていないおまえが返すのは当然だろう」

「そうじゃない。おごりなら、なぜ返さなくちやならないんだって言ってるんだよ」

「ふっ、相変わらず、せこいな」

Dが鼻で笑つたため、妖彦の怒りモードに油が注がれた。

「せこいのは、おまえのほうだ。だいたいあのときも、私が帰るって言つたのに無理やり『まあまあいいじゃないか』と誘つたのはお前だ。しかも店に入ってから、勝手に注文の品を決めて、私が遠慮すると『まあまあ、たまになんだから』といかにも、経費で落とすような口ぶりだつたじゃないか」

「何だよ、それ。じゃ俺が悪いみたいじゃないか」

「みたいじゃなくて、悪いだろうが」

「何だよ、おごつてやって文句言われるなんて、はじめでだ」

「おごつたんじゃないだろう」

「金を払つたのは、俺だろうが」

Dが怒鳴つた。

「それなら、返せなんて言うなよ」

妖彦は椅子から腰を浮かさんばかりの勢いで怒鳴り返した。

睨みあいとなった。鼻息を抑えながら妖彦が眼を細めると、Dはふっと笑い、首を横に振った。

「最低だな、おまえ」

「何が最低だ」

「そうだろ。わざわざ来てやったつてのに、挨拶もなく、この劍幕だ」

「原因はお前だろう。いきなり借りでもない金を返せと言いだしたのは」

さらに妖彦は、Dが自分のことを『相変わらず、冷たいやつだな』と言ったことを思いだし、

「どういう意味だよ。私が冷たいやつつて」

と問い質す。

「鏡で見せてやりたいよ。そんな顔で友だちを睨みつけて、借りの金を踏み倒そうとするやつが、冷たくなって何て言うんだ」

「よし、それを冷たいというのなら、わかった。それじゃ『相変わらず』つてのは、どういう意味だ？」

「妹の手紙を読んだくせに、線香一本上げに来ない」

「それは……」

痛いところを突かれ、妖彦は口ごもった。Dはその隙間に乗じるように、「いいよ、来なくて。それだけの金があったら、利子を付けて返してくれ」

と唇をへの字にすると、右手を差しだして、嫌みたらしく上下に揺すった。妖彦の全身の血液が沸騰した。感傷も世話になつた恩義も吹っ飛び、

「それなら私も言わせてもらおう」

「まだ言い訳する気かよ」

Dは顔を皺だらけにした。

「臭い顔するな」

「俺の顔より、この部屋のほうが臭え」

「黙れ。勝手に入ってきやがって。不法侵入で訴えるぞ」

「やってみ」

Dはにやりと唇を歪めた。

妖彦はクツと喉を詰まらせた。ぐわんぐわんと熱風で煽られた。できないとわかっていて馬鹿にするDの態度に、怒りがこみ上げたのだ。

「それなら、言うぞ」

「警察が信じるかな」

「そうじゃない。金のことだ」

「おお、返す気になったか」

「逆だ。私に返せ」

「お前に？」

「そうだ。私がお前に貸しているのを忘れたのか」

「おいおい、何だよそれ」

「とぼけるな。たしかにあのときの中華料理屋ではおまえが払った。私は払っていない」

「それなら、すぐに……」

「黙れ黙れ。最後まで人の話を聞け」

「おまえこそ、人の話を……」

「おまえが人か」

Dは肩と尻をびくつと揺らした。

やっと一本取った。さらにもう一本とばかり妖彦は、ざまあみろ、とあざ笑い、

「銀座の喫茶店で『やがて空から……』の打ち合わせをしたとき、お前、昼飯がまだだつてドリアを食っただろう。打ち合わせだから、そっちが払ってどうぜんなのに、お前金

を忘れたから、貸してくれって」

『やがて空から……』というのは、そのとき私が書いた短編のタイトルである。

「あのときは、おまえだって何か注文しただろうが」

「したよ。アイスコーヒーを。私のほうはそれだけで四百円。おまえはドリアとアイスコーヒーで千四百円。つまり私はあのとき、千四百円貸したままだ」

渋柿でも食ったように顔を歪めたDだったが、チツと舌を鳴らし、

「いいよ。それなら差額の六百円、返せ」

とまたしても右手をさしだす。

「いや、それだけじゃない。あれは『へらへら転校生』の打ち合わせのときだ。新宿の滝沢で打ち合わせしたとき、お互い千円コーヒーを飲んで、てっきり打ち合わせだからおまえが払うと思って恐縮したら、銀行で下ろし忘れたから立て替えてくれって、私に払わせたじゃないか」

妖彦はいきり立ち、もしDがしらばっくれたら切り出そうと、そのときの状況を記憶の表面に引っ張り出す。滝沢の混み具合、どの席だったか、隣りにどんな客がいたか、ウエートレスはどんなだったか。これまで何度も何度もこころの中で反芻してきただけに、すぐにでも言葉にできる。

けれども、Dも思いだしたらしい。一瞬、しまったとばかりに目を見開いたのだ。そのくせすぐに、フンと鼻を鳴らし、
「ったく、せつかく来てやったのに」
と吐き捨てた。

「誰が、来てくれと言った。勝手に来やがって、人をおどかしたのは、お前だ。昔からそうだ。だいたい金だけじゃない。お前くらい見栄っ張りで、裏表があるやつは……」
「つきあってられねえよ」

Dは両手を上げて、人を馬鹿にしたように横を向き、
「いらねえよ。金なんか。くれてやる」

と言った。妖彦はますます頭に来た。

「計算もできないのか。千四百円プラス千円で二千四百円だ。差額の四百円返せ」

「ふん、知るか」

「何だと。しらばっくれるのか」

「ああ、その通り。死んだんだから、返す義理はない。それに俺が借りたって証明でもできるのか？」

「証明って……」

「できねえくせに」

「てめえってやつは」

妖彦は両の拳をにぎった。

「殴っても素通りするだけだぞ。やってみるか？」

Dは身を乗り出し、ふてぶてしく片頬を差しだした。

限界だった。全力でぶん殴れば、少しはDにも痛みが伝わると思い、力を込めて、右の拳を振るう。

「きやつ」

背後から女の悲鳴がした。が、それどころではない。右手を押さえ、妖彦はうずくまる。

「井之さん、何を……」

ふり返ると、女が立っている。Dの妹だった。ここは……と見回すと、墓地だ。今、妖彦が全力で殴ったのは、墓石だったのである。

激痛に酔いが醒め、思いだした。Dの妹の手紙を読んだ妖彦は、感傷にかられて、夜が明けると最寄りの駅から、電車を乗り継いで、ここまでやって来た。その間、ずっと飲みっぱなしだったので、現実にいるのか、幻なのかわからない状態だったのだ。

そんな状態で、Dの実家に電話し、Dの妹と待ち合わせて、ここまで来た。

——井之さん、だいじょうぶですか？　だいぶ酔っているみたいですけど。
——なに、いつものことです。あいつとはいつも飲んだくれてましたから。

そんな会話をしながら、ここまで来た。わざわざ来てやったというのに……。

「その仕打ちがこれかよ」

妖彦は墓石を睨んだ。墓石がふてぶてしく笑うDとだぶった。

さらなる怒りが腹の底からこみあげてきた。あまりの激しさに、胃がねじれ、こみ上げるものがある。

まずい、と思う以上に、これだとばかり、思い知れと心で叫びながら――。